

ミアとクーボ



次女のミアは、小さい頃から生きものに好かれる子だった。小学校に行く途中に、母親の友だちの家があり、そこにはイチローという大きな雄犬がいた。イチローは、遠くからでも匂いで、ミアが近づいてくるのがわかる。そうすると、いつもうれしくて、「早く来て！」と吠える。ミアが来て、イチローに近寄ると、走ってきて大きな身体をぶつけてくる。おしっこをかけるときもある。犬がおしっこをかけるのは、親愛のしるしなのだ。

我が家では、ミアが3歳くらいの頃からずっと文鳥を2羽飼ってきた。黒い羽のクーボが雄、白い羽のピッチーが雌だ。生まれたばかりのひなを買ってきて、細かくした餌で育てた。小さな鳥カゴの中だけではかわいそうなので、窓を閉めて、マンションの3DKの部屋中を自由に飛べるようにした。

朝、鳥カゴの戸をあけると、文鳥はさっと飛びたって、部屋中を飛び回る。休

むときは、お気に入りの場所で休む。文鳥たちの一番のお気に入りの場所は、ミアの手のひらだ。文鳥たちに、家族のみんながいっせいに「おいで！」と手のひらをさしだすと、2羽とも、いつもミアの手のひらにとまる。ミアの姉は、そのたびにちょっと残念そうだった。

あるとき、1枚だけ部屋の窓が少し開いていたときがあった。そこからクーボが外に飛び出してしまった。家族は開いていた窓とは別の部屋にいたので、しばらくそのことに気づかなかった。でも、どうもピッチーのようすがおかしい。身振りや鳴き声で一生懸命、私たちに何かを伝えようとしている。私たちはクーボがいないことに気づいた。どうやらクーボが外に出て行ってしまったようだ。

あわてて、家族みんなで外を見ると、クーボらしい小鳥が団地の中を飛び回っている。母親とミアはあわてて外に出た。クーボは団地の給水棟の屋根にとまっていた。ミアがクーボに呼びかける。でも、広いところに出て怖かったのだろう。クーボは給水棟の屋根から飛び立ってしまった。ミアは一生懸命に何回もクーボに呼びかけて、手のひらをさしだした。すると、何回目かの呼びかけにこたえて、クーボはミアの小さな手のひらにおりてきた。

文鳥の平均寿命は8年から10年だという。しかし、部屋の中を自由に飛び回らせていたからなのか、我が家の文鳥たちは長生きだった。やがてピッチーは12歳くらいで亡くなり、クーボは1羽だけになった。それでも、クーボは元気だった。

ピッチーが亡くなって3年経ち、ミアは高校3年生になり、大学受験のため

の勉強に集中していた。クーボは 15 歳になっていた。ミアは休憩のとき、部屋のふすまを少しあける。すると、クーボはその隙間からすばやくミアの部屋にピョンピョン跳ねて入ってくる。そして、ミアの手のひらにおさまるのだ。

寒い冬のある朝、ミアはまだ自分の部屋で寝ていた。すると、クーボが、閉まっているふすまに小さな身体を何回もぶつけてきた。「中に入れて！」と言っているようだった。ミアがふすまを開けると、クーボはミアの手のひらで安心したように目を閉じた。数日前からクーボは少しずつ弱っていた。

その日、ミアは、昼は高校に行き、夜は塾に行かなければならなかった。高校から帰って、塾に出かけるまでの間、ミアは、クーボの小さな身体をブランケットにつつんで、手のひらで暖めてあげていた。クーボはどんどん弱っていった。クーボのことを心配しながら、ミアは塾に行った。母親は、ミアが塾に行っている間に、クーボが死んでしまうのではないかと心配だった。塾の終わる時間に、母親は、ブランケットに包まれたクーボをひざにおいて、車でミアを迎えに行った。塾が終わって、ようやくミアはブランケットの中のクーボに再会することができた。

塾からマンションに戻って 30 分もしないうちに、クーボはミアの手のひらの中で呼吸を止めた。安心したような表情だった。

(1562 字)

(2020.4 Written by Masami KADOKURA)



この作品はクリエイティブ・コモンズ 表示 - 非営利 - 継承 4.0 国際 ライセンスの下に提供されています。この作品を利用する場合は、「たどくのひろば」を出典として示してください。

例) 出典: 「たどくのひろば」 (<http://tadoku.info>)

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 4.0 International License. When you use this work, please indicate the source as in the example above.